

### 3・11 震災とエグゾダス体験

小河, 久志 / 栗原, 奈々子 / 甲, 洋介 / 中島, 成久 / 堀  
川, 智子 / 小野澤, 正喜 / 佐々木, 直美

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化. 論文編 / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

149

(終了ページ / End Page)

170

(発行年 / Year)

2013-04

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008697>

## 3・11 震災とエグゾダス体験

中島 成久（他 6 名）

NAKASHIMA Narihisa

中島成久（国際文化学部教授）

小野澤正喜（育英短期大学教授／筑波大学名誉教授）

甲 洋介（国際文化学部教授）

栗原奈々子（インディペンデント映画監督）

佐々木直美（国際文化学部准教授）

小河久志（大阪大学特任助教／法政大学兼任講師）

堀川智子（国際文化研究科卒業生）

### 1. はじめに

地域研究コンソーシアムの資金援助を得て、「3・11 被災後のディアスポラ・コミュニティにおけるコミュニケーションの総合的研究」というプロジェクトを2年間（平成23年4月～平成25年3月）実施中である。この予算により、2011年秋から2012年春にかけて、以下の活動を行うことができた。

(1) 茨城県大洗町のインドネシア人コミュニティの調査

（参加者：中島、小野澤、甲、栗原）

(2) 宮城学院女子大学の「3・11と外国人被災者」シンポジウム参加

（参加者：中島、小河）

(3) 茨城県国際交流協会訪問

（参加者：中島、佐々木）

(4) 南相馬被災地訪問

(参加者：中島、小野澤、小河、堀川)

## (5) シンポジウム「原発震災被災地復興の条件——ローカルな声」 の実施

国際文化学企画であり、地域研究コンソーシアム社会連携部門、京都大学地域研究統合情報センター災害対応の地域研究部門との共催で実施された。本プロジェクトからの参加者：中島（司会）、甲、小野澤、栗原、小河、堀川（テープ起こし担当）。このシンポジウムの記録は、地域研究コンソーシアムの報告集として刊行される予定である。したがってこの報告では取り上げない。

今回の報告は、「エグゾダス」というキーワードでこれまでの活動をまとめ、これからの活動の指針を得るための第一歩である。

エグゾダスという言葉は、南相馬を訪れた際、原発事故のため、故郷を追われ、いまだに仮設住宅やその他の異郷で生活を余儀なくされている人々の置かれている状況を示す言葉として使っている。長期に帰郷できない状況と共に、一部では避難先や仮設住宅においても家族成員がある一定期間以上離散せざるをえない状況が続いており、ディアスポラと通じる状況に置かれていることは間違いない。

## 2. キリスト教で結束する大洗のインドネシア人コミュニティ

### 2-1 コミュニティの歴史と特徴<sup>1</sup>

大洗町は全人口に占める外国人の割合が茨城県では常総市に次いで多い町である（表2参照）。震災前には全人口の5%超が外国人登録を済ませた外国人である。観光ビザでの入国者もいることだろうから、実際にはもっといる。

2011年の人口と外国人登録者数の変化を示しておく<sup>2</sup>。2011年の大洗町の総人口は震災直前の2月末で18,188人、世帯数7,016であるが、4月末に18,072人と116人減少し、世帯数も6,993と23世帯減少している。ところが12月末には人口は17,908人とさらに減少している

が、世帯数では4月を上回る6,998世帯と回復傾向が見て取れる。単身者が転出していったことがわかる。

これを外国人登録者数でみると面白い数字が出てくる。2月末の外国人登録者数は970人であるが、4月末には743人と227人減少している。ところが、12月末には799人と4月末時点よりも56人増え、回復傾向にある。

被災地では中国人研修生などを中心に帰国者が多数みられたが、宮城学院女子大学でのシンポジウムの中で、「外国人登録者数ではむしろ増えている」と述べられている。研修生、留学生、外国人登録者と、そのステータスに応じて、日本社会とのコミットも異なる。

2011年10月9日（日）～10日（月、祝日）の2日間、調査を行った。大洗町には、最盛期800人ほどのインドネシア人が在住していた。1980年代末のことである。3・11被災後の2011年秋現在でも400人余りが在住している。

このインドネシア人コミュニティはきわめてユニークである。大洗在住のインドネシア人のほとんどは、ミナハサ出身者であるということである。ミナハサ人とはインドネシア・スラウェシ島北部（北スラウェシ州）に住む人々で、人口約100万人。オランダ植民地時代にキリスト教（プロテスタント）に改宗している。

オランダ支配下の1930年代から琉球の糸満漁民がミナハサを頻繁に訪れ、ミナハサ女性と結婚し、子供をもうける人も出てきた。そして日本統治時代の到来で日本軍男性とミナハサ女性との「結婚」があった。日本敗戦後そうした男性の大半は帰国した。現在彼らの「三世」が住んでいる。

1980年代の半ばから、大洗の水産加工業の労働者としてインドネシア人やフィリピン人が住み始めた。中には不法滞在者もいた。1990年の入管法改正で、そうした不法滞在者が次第に帰国を余儀なくされると、彼らに代わるように、「親族訪問」してくる日系ミナハサ人が

増え始めた。

ミナハサ人のリクルートには水産加工会社社長のササキさんの個人的なネットワークが大きい。彼の工場にミナハサ人女性がいる、そのネットワークを通して次第に何百人という日系ミナハサ人が来日するようになった。

茨城県には多数の外国人労働者が居住する。大半は労働者や研修生であるが、つくば市の外国人登録者数 7,581 人（2009 年）のうち筑波大学の留学生が 200 名あまりいるのも特徴である。<sup>3</sup> 震災前に 5 万 6000 人あまりいたが、震災後 5 万 2 千人に減っている。

## 2-2 大洗ベツレヘム教会 12 周年記念祝典

3・11 地震の 1 時間後に大洗を数メートルの津波が襲った。大洗港を襲う津波の映像がネットにもアップされた。港の中で、大きな渦を巻きながら、漁船が次々と沈んでいった。以下に述べるベツレヘム教会の敷地にも 1 メートルの津波が達したが、大きな人的な被害はなかった。しかし彼らの多くが従事していた大洗港を拠点とする水産加工業者は津波被害を受けており、したがって彼らの生活も大きな影響を受けた。

2011 年 10 月 9 日、大洗ベツレヘム教会の創設 12 周年記念式典が開かれた。大洗在住のミナハサ人をまとめるのに彼らの宗教（プロテスタント）は深くかかわっている。そのコミュニティ意識が 3・11 被災でも明瞭に発揮された。

10 月 9 日は大洗ベツレヘム教会の創設 12 周年記念祝典であるが、プロテスタント特有のデノミネーション（教派）によって、大洗に 5 つのデノミネーションが存在している。大洗でのデノミネーションを分けるのは、出身地のデノミネーションである。たとえ人数が 10 人ほどの極小教会であっても、独立した教会として活動している。大洗ベツレヘム教会は信徒数 150 人で、その中の最大の教派である。

この日に他のデノミネーションの人々も招待され、式典終了後の会食では楽しい交流会が催された。この式典には関東ベツレヘム教会からも来賓があり、挨拶をした。また、インドネシア大使館からも来賓があり、祝辞を述べた。

式典会場はある水産加工会社の倉庫であったが、そこを借りて、教会としている。5メートル×20メートルの一階は会食などの行事が行われる空間である。

教会は、元倉庫だったとのことだが、大きな窓が両側に多数あり、海側の南側の窓からはさんさんと光が入り、レースの白いカーテン風に揺れて、質素ながら祈りの場にふさわしく、清らかで美しかった。建物の様子自体に信者の人たちの信仰の深さを感じた。

2階の会場の正面には、次のようなスローガンが掲げられていた。

Tema: Tuhan Itu Baik Kepada Semua Orang

テーマ：「神はすべての人に等しく善をなす」

Sub Tema: Membangun Spiritualitas Jemaat Yang Mampu Berperanan Aktif Dalam Pelanan Berdampak Dalam Tindakan Dan Karya

サブテーマ：「信者の精神性をさらに高め、礼拝で積極的な役割を十分果たすこと」

このスローガンから分かる通り、大洗在住のミナハサ人コミュニティの宗教意識の強さが顕著に示されている。それは、震災体験でも、「信仰があったから救われた」と神へ強い感謝の言葉が強く示されたことで理解できる。

祝典は、式次第に則り、整然と行われた。それを時系列に従って整理する。

#### ① 礼拝の開始

参列者は全員起立し、ドラムの合図で参列者へ式典開始を知らせる。司会の二人の男女が参加者全員へ謝意、特にインドネシア大使館から

の参加者、関東ベツレヘム教会の指導者、法政大学からの参加者、大洗在住の他のデノミネーションの代表者、その他に特別な謝意を表した<sup>4</sup>。

② しばらくしてから讚美歌 KJ 第二番「スチ、スチ、スチ」<sup>5</sup>のソロ

③ 牧師役の一人が以下のように呼びかけた。

Bersorak soraklah bagi Tuhan, hai seluruh bumi!

天地全能の神を祝福します

Beribadahlah kepada Tuhan dengan sukacita,

喜んで神のために尽くします

Datanglah ke hadapanNya dengan sorak sorai

祝福とは神の下へ参ることです

Ketuhanlah, bahwa Tuhanlah Allah

トウハンとはアッラー<sup>6</sup>のことです

Dialah yang menjadikan kita dan punya

あなたによりわれわれはここにいて、われわれはあなたの一部です

Dialah kita, umatNya dan kawanannya domba gembalaanNya

神こそがわれわれをお造りになりました

Masuklah melalui pintu gerbangNya dengan nyanyian syukur,

祝福の歌を携えあなたの門に入ります

Ke dalam pelataranNya dengan puji, pujian

あなたの庭に入ります

Bersyukurlah kepadaNya dan pujilah namaNya!

神を讃え、その名を唱えます

Sebab Tuhan itu baik,

神はわれわれに善をなしてくださるからです

Kasih setiaNya untuk selama, lamanya,

そして永遠の信仰を誓います

④ 日曜学校で学ぶ生徒の踊り

⑤ 牧師役の一人が次のように呼びかけた。

Terpujilah Allah hikmatNya besar,  
神の御教えの深甚さを讃え  
Begitu kasihNya untuk dunia cemar  
この汚れた世界に愛を与えてくださる  
Sehingga diberilah PutraNya kudus  
あなたに従う者たちが忠誠心を持ち、高めてくださる  
Mengangkat manusia serta menebus  
人々を完全なる道に導きたまえ  
Reff-Pujilah, pujilah buatlah dunia,  
(リフレイン) 創造の世界を祝福しよう  
bergemar, bergemar mendengar suaraNya,  
あなたのお声を聴くのは喜びである  
Dapatkanlah Allah demi demiputraNya,  
御子のために創造主はある

⑥ 水戸市のベツレヘム教会の牧師のあいさつ

信仰があるからこそ、大きな災害の時でも誰一人として犠牲になる者がなかった。そうした災害の後、信仰を求めても無駄である。日ごろの行いで、神への思いを示していなくては、困ったときの神頼みでは、遅い。

⑦ 余興

若者の踊りや歌、演奏が続いた。数名の若者による寸劇では、不況下で職を失っても信仰と人の絆を失うことなく、よき市民であろう、とのメッセージが込められていた。

式典終了後、1階に移り、会食。参加者がそれぞれ手料理を持ち寄り、会食。2列に置かれた長いテーブルには、招待された客の持ち寄った料理が並んでいた。参加者は150人を超えた。

在東京インドネシア大使館の一等書記官も夕方遅れて到着し、パ

ワーポイントを使った挨拶を行った。彼の発言のほとんどは、「オーバーステイをするな、もしそうなったら大使館にまず出頭せよ、その後しかるべき対応を考えろ」というもの。挨拶というよりは、「説教」という様子で、周りの人々は神妙に聞き入っていた。

その後関東ベツレヘム教会の日本人の代表が挨拶。日本とインドネシアの友好を祝し、またベツレヘム教会の発展を願った。最後に中島が法政からの出席者を代表してインドネシア語で挨拶した。挨拶を頼まれると予想していたので、形式的表現に富んだインドネシア語を準備していた。

会場の外では子供たちが遊んでいた。流行のアニメの主人公のジャケットを着ていて、屈託のない笑顔が印象的であった。日本の学校に通っているとのことであるが、うまく適応しているようであった。

### 2-3 震災時のミナハサ人コミュニティ

翌10月10日（体育の日）に牧師役のD氏とその家族、友人ら7～8人に震災体験についてインタビューができた。中島、栗原が参加した。インタビューは主にインドネシア語で行った。中島の院生が録音し、後でそれを再生して、以下の記録を作った。ある家に住む3家族とその友人たちが集まってくれた。日ごろもとても密な人間関係を築いている人々である。彼らは地元の水産加工会社に勤務しているが、別々の会社である。D氏を中心にインタビューが行われたが、D氏以外の人の発言も含んでいる。

Q: 震災の時、どこで何をしていましたか？

A: ミナハサ人の大半は会社の工場にいた。直後に電気が飛び、会社の中も物が散乱した。その後、役場の放送があり、津波が来るのを知った。何を言っているのかよく分からなかったが、言葉の「迫力」で緊急事態であることは分かった。家族の安否を確認するためアパー

トに戻った。津波は海の近くでは数メートルに達し、工場も破壊された会社もあった。自分たちの会社はそう大きな被害は出なかった。

Q: 家族や友人との連絡はどうしましたか？

A: 携帯も使えないので、貼り紙、書置きをして、お互いに安否を確認しあった。自分たちの教会にも1メートルの津波が押し寄せ、1階に置いてあったものが使い物にならなくなった。それでも、建物は無事だったので、ここを中心として、友人知人の安否を確認しあった。

Q: 3・11の夜はどうしましたか？

A: 余震が頻繁に起き、自宅のアパートの安全性が心配だったので、車で逃げ、そのまま車の中で夜を明かした。アパートは会社の所有であるが、そこを月5万5000円で借りている。3家族で住んでいる。

Q: 2日目から避難所の生活が始まったわけですが、いかがでしたか？

A: 大洗町役場からの命令で、近くの小学校の体育館に避難した。そこに1週間、日本人やフィリピン人、中国人など他の外国人と一緒に生活をした。救援物資は行き渡り、食事、水、毛布などが支給された。自宅に着替えに帰ることも可能で、そう苦労はしなかった。

ただ、トイレの水を流すのは大変だった。プールの水を汲んできて、それを使ったのであるが、われわれがその仕事を担当した。日本人は食事の世話、その他の仕事で疲れていたのも、プールの水汲みはわれわれの仕事だった。

Q: インドネシアとの連絡はどうしましたか？

A: 日頃はインターネット、Facebook、スカイプなどで故郷との連絡はしているが、電気が使えないので、テレビも見られないし、電話も通じない。

3・11以降日本で何が起きているのかをインドネシア・サイドからはよく分かったが、肝心のわれわれは何が進行中であるのか、よく分からなかった。津波に襲われる映像がインドネシアでも流され、非常

に心配していたが、コミュニケーションの手段が奪われてしまった。

牧師さん役のD氏はインドネシアに残っている家族への仕送りを続けている。メナドの大学に通う息子への仕送りは大変だが、楽しみでもある。そうした仕送りに対して、故郷からはコーヒー豆が送られてくる。スラウェシはいいコーヒーの取れるところで、そうした特産品が時々送られてくる。

Q: インドネシア大使館は被災インドネシア人の救援に乗り出し、バスを用意し、帰国を呼びかけたが、大洗在住の人たちはどんな対応をしましたか。

A: 大洗でも30人ほどが帰国した。他の被災地で帰国した人の大半は留学中の学生だった。自分たちは大使館の呼びかけには応じず、ずっと避難所で他の被災者と一緒に生活を続けた。

Q: 避難所での生活はいかがでした？

A: これまで経験した中で、もっとも過酷なものだった。救援物資を日本人も外国人も分け隔てなく配っていたのには感動した。東京の大学生がボランティアに来ていて、助かった。

健康、安全の面でそう心配はなかった。まだ寒い頃だったが、毛布を支給され、体育館の中はそう寒くなかった。時々自宅に帰れたので、プライバシーに困ることはそうなかった。

われわれは仲間と教会を共にして、一つのコミュニティ。避難所でも仲間とずっと一緒でお互いに助け合おうという意識が強かった。ガソリンがなかったので、われわれはみんなで共有しあった。ところが、日本人の場合家族単位で「孤立」しているような印象を受けた。中には犬、猫などのペットと一緒に避難してきている人もいて、びっくりした。インドネシアでは考えられないことだ。

無人になった街に盗みがほとんどなかったことには驚いた。自分たちのアパートも玄関に鍵を掛けただけで、安全だと確信した。インドネシアでは考えられないことだ。1998年、スハルト退陣の年にジャ

カルタにいたが、その時の情勢に比べれば、はるかに安全であった。コンビニにも電気がなく、ランプで営業を続けていたが、みな整然と並んで自分の番を待っていた。商品の略奪もなかった。

避難所が満杯になったので、1週間後、水戸市の学校に移動した。しかし、次の日から、電気が復旧し、会社も始まったので、自宅アパートに戻った。日曜日には、教会でのサービスも復活した。

Q: 被災と信仰についてどう考えていますか？

A: われわれには信仰があり、神を信じることで助かったとはいえる。聖書にも大洪水の記述があり、その意味は知っている。だが、大洗以外では2万人余りが犠牲になっているので、そうした人たちが「信心がないから不幸に遭った」とは思わない。神は信仰のあるなしにかかわらず、「すべての人々の安寧を守っている、すべての出来事は神の意思だ」。われわれが無事で、犠牲者が一人も出なかったことを、神に感謝するだけ。

水戸市にあるベツレヘム教会のヤマモトさんが頻繁にわれわれのもとを訪れ、いろいろ相談に乗ってくれたので、助かった。

Q: 3・11後の変化について

われわれの会社は何とか再開できたが、小さな会社の中には津波で施設が流されて、再建が難しい会社もある。津波、放射能の影響で農業関係の仕事についている人の中には、仕事を失った人もいる。

一時帰国をしていた人も次第に帰ってきた。震災前から、日本人との付き合いは大事にしてきた。夏祭りの時には、出店を出し、マナド料理をふるまう。とても辛いですが、それが好きだという日本人もたくさんいる。

役場もよくしてくれている。必要な情報をすぐに出してくれる。

大洗はすでに自分たちの「故郷」(tanah-air)だ。たとえ他所に働きに出かけていても、すぐに帰りたと思うところ。<sup>7</sup>

2時間余りのインタビューであった。少額のスパンガン（寄付）を出すと、東京に帰るわれわれのために、祈ってくれた。「法政大学からのみなさんが無事に帰京され、また、元気で活躍されることを、アーメン!」。インタビューの後、こういう祈りで送り出されることは初めての体験であった。

### 3 水戸市の茨城県国際交流協会

2011年12月17日（土）に宮城学院女子大学で、「3・11 私たちもともに震災を乗り越えた～「外国人」県民の視点から震災後の宮城と日本の多文化共生を問う～」というシンポジウムが行われた。その報告はすでにネット上で公開されている<sup>8</sup>。このシンポは宮城県国際交流協会との共催であり、シンポ終了後大村昌枝氏（宮城県国際交流協会課長）と話す機会があり、茨城県での国際交流協会の3・11時の活動について興味を持った。

2012年2月9日、茨城県国際交流協会を佐々木直美氏と訪ね、有意義なインタビューを行うことができた。地方自治体の国際交流活動の詳細を知ることができ、今後国際文化学部はこうした活動と連携を図るべきだと痛感した。

茨城県には震災前56,000名の外国人が住んでいたが、震災後は52,000名余りに減っている。筑波大学などへの留学生のほかに、水産加工、農業研修生などの資格で、ブラジル、ペルー、中国、韓国、タイ、フィリピン、インドネシア人が住んでいる。

震災以前からこうした外国人居住者へ8言語（英語、中国語、スペイン語、ポルトガル語、韓国語、タイ語、タガログ語、インドネシア語）による支援が行われてきたが、震災後はその支援体制をさらに強化している実態がわかった。

阪神淡路大震災以降、地方自治体による外国人支援は本格的になされ、2004年の中部地震、2007年の中部沖地震を経て、災害時外国人

支援体制は本格的に整備され、3・11でもその体制が生かされた。

例えば、諸外国語によるネットでの案内でも、全国にいる翻訳支援ボランティアが草稿を作り、最後に茨城県でチェックして、県のHPに公開した。

さらに、災害多言語支援センターを昨年3月16日に拡充し、3月31日まで毎日上記8言語による電話相談に応じた。電気・水道・ガス・交通インフラ情報、放射線など原発事故関連情報、その他外国人に有用な情報、の提供に努めたとのことである。

それに加えて、外国人相談センター体制を拡充し、帰国手続きなど、外国語による電話相談を集中的に行った。

4月以降は通常の体制に戻したが、在留資格を維持するため、婚姻関係は破たんしているのに、在留資格を維持するためだけに婚姻関係を続けてゆき、しかもかなりの費用負担を前提にしてその関係の維持がなされている実態を垣間見ることができ、今後さらに詳しく調査してみる価値がありそうな課題が浮上してきた。

この日はインドネシア人の担当者はいないとのことであったが、出勤されていることがわかり、筑波大学で日本語を学んでいるLさんにインタビューできた。まだ30代前半にしか見えないLさんであるが、40代半ばで、二人の男の子がいるとか。インドネシアのミナカバウの出身で、そこを研究している中島とはすぐに意気投合して、多くの有意義な話をすることができた。

ただ個々の相談の内容については、個人情報を守るに聞き出すことはできなかった<sup>9</sup>。

国籍別での人数をみると、最も多いのは中国で15,995人である。次いでブラジルが9,873人、フィリピンが8,414人、韓国又は朝鮮が5,717人、タイが4,989人、ペルーが2,094人、インドネシアが1,698人となっている。以下、スリランカ、ヴェトナム、米国と続く。米国

人の場合には英語の教師が多いと予想されるので、全体の実態から外して考えてよいだろう。すると、就学者以外では技術者、研修生、単純労働者の実態がよく分かる。

それは県内各地の分布状況を詳細にみていくと、さらによく分かる。沿岸部の大洗町、銚田市などには水産加工労働者が多く、内陸部の市町村には農業技術研修生が多い実態がよく分かる。

表1 茨城県内国籍別外国人登録者数<sup>10</sup>

	2009年	1999年	増加数	増減率(%)
中国	15,995	6,211	9,784	157.5
ブラジル	9,873	10,204	▲ 331	▲ 3.2
フィリピン	8,414	4,637	3,777	81.5
韓国又は朝鮮	5,717	5,798	▲ 81	▲ 1.4
タイ	4,989	3,913	1,076	27.5
ペルー	2,094	1,758	336	19.1
インドネシア	1,698	1,087	611	56.2
スリランカ	983	570	413	72.5
ヴェトナム	742	339	403	118.9
米国	703	634	69	10.9

表2 外国人登録者に係る人口比の順位 (単位：人) 2009年統計

順位	市町村名	登録者数(A)	人口(B)	(A) / (B)
1	常総市	4,981	65,472	7.6%
2	大洗町	1,037	18,512	5.6%
3	銚田市	2,224	50,504	4.4%
4	下妻市	1,985	45,366	4.4%
5	八千代町	956	23,072	4.1%
6	つくば市	7,581	213,159	3.6%
県内合計 (44市町村)		56,738	2,967,203	1.9%

\* 出典は表1と同じ。

#### 4 南相馬被災地訪問

2012年4月14日（土）から16日（月）までの2泊3日の日程で、福島県南相馬市を訪れた。参加者は中島、小野澤、小河、堀川の4人。

国際文化研究科を2010年修了された岡田（堀川）智子さんの出身地ということで、彼女のネットワークを頼りに、南相馬市議の同級生、元福島原発労働者、相双（（相馬市、南相馬市、双葉郡など旧相馬中村藩の所領の大半を含む）地区の重要産業である縫製業者、それに堀川さんのご両親、仮設暮らしをしているおじいさん、おばあさんなどとインタビューをすることができた。

南相馬市は、原町市、鹿島町、小高町という3市町村が2006年（平成18年）に合併してできた市である。平成23年2月末時点の人口は71,494人であったが、3・11を経て1年後には66,808人と4,686人減っている。ところが、2012年3月11日時点の住民基本台帳登録者数は71,561人と震災前を若干であるが上回っている。これは、双葉郡や飯館村からの避難者が南相馬市内の避難所に移っている結果であって、南相馬市内が安全になったという証拠ではない。

福島第1原発がある双葉郡と隣接している。南端の小高地区（旧小高町）は、4月16日に昼間だけ立ち入りができるようになったが、インフラが復旧していないことなどを理由に夜間はまだ立ち入り禁止区域である。

その中心は原町（旧原町市）である。原町の中心部を歩くとおしゃれな街並みに驚く。ここは、原発地区（楢葉、大熊、浪江）など現金収入の多い所から買い物に来る人が多いので、けっこうしゃれたお店が集まっている。

南相馬を単純に農村地帯と考えていると誤解をしてしまう。もちろん農業をやっている人も多いが、多くは兼業農家である。第一次産業従事者（主たる生計費を農業や漁業で得る者）は全人口の1割ほどにしか過ぎない。堀川さんの実家の例で説明すると、おじいさん、おば

あさんが第一次産業従事者で、ご両親は兼業農家、二人の弟さんは第二次産業、あるいは第三次産業従事者である。

相双地区の重要産業である縫製業や、IT産業の労働者もいる。縫製業には中国人技術研修生もいる。中国技術研修生の大半は震災後帰国した。しかし震災だけがそのきっかけではなく、震災以前に仕事がなくなって帰国したというケースもあった。

こうした多様な階層を示す南相馬の復旧は容易ではない。政府の手で除染作業が進められているが、山間部の放射線量の高い地区はそのまま残り、いくら除染しても「放射線は山から流れてくる」状況がまだ続いている。復興構想をどう描くのか、それに向けての動きはやっと始まったばかりのようである。

#### 4 - 1 南相馬市議の但野謙介氏

堀川さんの同級生である但野さんは、原町高校を出た後、一橋大学に進学し、その後NHKに就職された。しかし数年で退職し、仲間とある事業を始めていたが、2006年引退する2名の市議の地盤を同時に継承して市議選に出馬し、トップ当選を果たした。

2011年3月11日は議会の開催中であった。激しい揺れが収まった後、震災で動きの取れない高齢者、障害者の支援に従事した。但野氏の出身は鹿島地区である。そこを中心として、支援活動を続けた。南相馬は石巻のような市街地だけで後背地のない被災地とは異なる。農村地帯が広範に広がり、農家の備蓄を支援事業に利用できた。それだけ、従来のコミュニティが支援の中核として機能した。

南相馬の被害の中で病院の被害が一番大きい。人口が最大6割減り、外部からの患者を入れても震災以前よりも2割患者数が減った。人口の変動に応じた病院の再生が必要。

震災直後、ガソリン不足には困った。食糧があり、水があっても、ガソリンだけは自給できない。そこで市内各地のガソリンスタンドと

連携して、備蓄を平等に給油できるよう根回しした。

それとコンビニにもできるだけ営業を続けるよう要請した。原発事故の影響で供給が途絶える中、一軒だけは最後まで営業を続け、重宝された。

将来構想として、自然エネルギー一点張りの構想には反対。双葉郡などこれまで原発推進で動いてきて、こういう事故が起きたが、急速に廃炉を打ち出した県の方針には賛成できない。国と直接交渉すべき。いろんな選択肢を出して、国からできるだけ多くの予算を取り、経済の再生計画を立てるべきである。

南相馬には原発はないが、浪江・小高原原発構想があった。その構想交付金として1億円が出ていた。それと関連して、核燃料税や核廃棄物税などが交付されていた。

#### 4-2 元原発労働者 M さん (30 代初め) とその夫人 (20 代後半)。

原発の内部には入ったことはないが、敷地内の足場作業を専門に行う会社の労働者。数年前から原発敷地内の作業をやるようになった。敷地内に入るには、特別の講習を受ける必要があった。

3・11の震災時には、福島第2原発で足場作業中であった。激しい揺れが収まった後、津波の危険性があったので、その場を退去して本部棟に行くと、誰もいない。みなすでに逃げてしまっていた。全員乗ってきた車で避難したが、小高の家に帰る途中の道路が、地震で激しく損壊し、迂回してやっと帰れた。

実は福島第2も津波の浸水を受け、全電源が一時ストップした。ここまでは第1と同じであるが、幸い外部電源が復旧し、原発震災の危機をなんとか回避できた。

使用済み燃料プールには大量のごみが溜まる。作業用の工具とか、コンクリート片などが落下し、そうしたものを除去する必要がある。日本の労働者だと一回潜ると、一生に許される被ばく量を超えるので、

日本人労働者は使えない。そこでアメリカ人の潜水士が来ていた。彼らには日本人の許容被ばく量は適用されないで、可能となった。そうした潜水士の潜水具の着脱を手伝ったことがある。

原発労働者の放射線に関する知識は十分ではなかった。労働者の中にはガン患者もいて、「適当に放射線を浴びているから、それで治療になる」、と冗談とも本音ともとれるようなことを言っていた人もいた。

3・11の後、原発での仕事はなくなったので、原町の海岸部にある火発（火力発電所）の足場作業をしている。

小高は妻の実家で、そこで父親と祖母、それに M さん夫婦と子供で生活していた。しかし、3・12の水素爆発以来父親だけ市街で仕事をし、他の家族は南相馬市原町区の仮設で生活をするなど、家族ばらばらの生活をするようになった。娘がいるが、風評被害が一番困る。将来適齢期を迎えた時、「南相馬出身者だからアブナイ」と言われるのが辛い。

#### 4-3 縫製業者栗原利行氏

自分は群馬県の出身で、中学卒業後都内のある縫製工場で働き、腕を磨いた。その間に文化服装学院で4年間勉強したことが、コシノジュンコ氏などと知り合うことにつながり、現在の基礎を築いた。一級洋裁師の資格を持つ。しかし40代半ばでこの工場に勤務し続けることに見切りをつけ、「誰も知らない」鹿島の地で、オーダーメイドの高級服を作る工場を建てた。ご本人は、全く土地勘のない所に来た、とおっしゃっているが、隣の相馬市は奥さんの出身地。そうした土地勘はあったのだろう。

もともと、相双地区は縫製業の盛んな所で、地元の主婦などを労働者として雇い、家内工業としてやっていた。栗原さんの工場の違うところは、一般向けの製品ではなく、東京のモデルさんなどからの発注

を受け、完全なオートクチュールを制作している、ということ。

震災前には腕の確かな地元の主婦数人を雇用していた。中国人労働者を雇用して、安い製品を量産するところもあるが、「うちはそのようなことはしない」。「中国の田舎から出てきたような人に、高級製品の縫製は任せられない」。

震災で工場の半分は倒壊した。震災後休業しようかなとも思ったが、お客さんからの注文もあり、完全な休業はしていない。損壊した工場の機材は青森県の同業者に寄付した。自分一代で建てた工場ではあったが、身を切られるような経験をした。

震災で失業した人の中には、いまだに失業保険をもらい続けている人もいるが、「仕事はあるのに働かない人もいる」。確かにこうしたごね得のような人もいるだろうが、それで震災の悲惨さを誤解してはならない。

栗原さんは外国人高校生を地元の高校に1年間留学させる団体（国際教育交流協会）の仕事もしていて、国際交流の分野でも名声を得ている。お世話をした卒業生が家族を連れて震災後南相馬を慰問に来て、感動した。

「自分はオートバイで外国旅行をするのが趣味であったので、何らかの恩返しをしたい」と思っていた。現在でもそうしたツーリング時代の旧友と交流し、連絡を取りあっている。<sup>11</sup>

#### 4-4 堀川さんのご両親、仮設暮らしをしているおじいさん、おばあさん

3・11の震災時、彼女のご両親はそれぞれ勤務していた職場にいた。二人の弟さんも近くの職場にいた。海から1.5キロ離れている自宅（南相馬市原町区萱浜）には、おじいさん、おばあさんの二人がいた。

地震の揺れが収まった後、しばらくしてから海のあたりで「ドーン」という地響きを伴う爆音があった。後から考えると、その時、海岸に設

置いていたテトラポットの護岸が崩れたのだろう。津波は彼女の家から海沿いの住宅をほぼ全壊させた。彼女の家には高さ2メートル余りの津波が押し寄せ、自宅は半壊。農機具が多数流された。

おじいさん、おばあさんは避難しようかどうか迷っていた。道を見ると、車で逃げる人、歩いて逃げる人、様々だった。そうした中、2キロ離れた自動車修理工場で働いていた末の弟さんが、自分の車を駆って救出に来た。もうすぐ津波が押し寄せるという緊迫した中、おばあさんは「家の戸締りをしないと・・・」と引き返そうとする。「そんなことはいいから」とおばあさんの手を強引に引いて、車に乗せ、時速「200キロ余り」で走った。見ると津波が車のすぐ後ろにまで迫っていた。

高台に逃げる間、途中で歩いている人を何人も見た。あの人たちはどうなったのか？「お前はあの人たちを見捨てたのではない」と周囲の人に励まされ、弟さんも意外にさばさばして、「人間死ぬときは死ぬんだ」と達観している。下手をしたら、自分の祖父母も自分も津波に飲み込まれてしまっていたかもしれなかったから、生死を分けたりぎりぎりの瞬間を体験したのである。

一家はまず近くの避難所に身を寄せ、その後、飯館村の避難所に移った。しかし、南相馬の原町へ戻ることが1か月後には許されたので、自宅に戻った。一階は壊れていたが、二階部分はなんとか住めた。ご両親の職場も復活したので、その方がよかった。

しかし、おじいさん、おばあさんは仮設住宅に現在も住んでいる。6畳と4畳半二間の狭い仮設であるが、自宅にいると昼間誰も話し相手がないので、仮設の方が気が楽とのこと。隣の人と話すことはまずない。だれがどんな心の傷を負っているかわからないので、お互いそうした領域には入り込まないよう配慮している。

仮設で生活物資に困ることはない。全国からの支援物資が行き届いている。ものによっては有り余るほどの物資もある。

4月16日、月曜日の午前、解除されたばかりの警戒区域（原発20キロ圏内）に入ることができた。震災直後の姿がほぼそのままの形で残されていて、すさまじい破壊の跡を現在でも見る事ができた。小高地区福浦では地震により地盤沈下を起こし、広大な「池」が残されていた。排水作業が月曜日からはまったばかりだが、海に続く道路がそのまま水没していく様は、リアルすぎて言葉もなかった。

〔注〕

<sup>1</sup> 大洗に関する先行研究として以下の文献を参照した。

奥島美夏 編著『日本のインドネシア人社会—国際移動と共生の課題』明石書店、2009年。目黒潮、茨城県大洗町における日系インドネシア人の集住化と就労構造、「異文化コミュニケーション研究」第17号（2005年）、神田外国語大学、Riwanto Tirtosudarmo, The Making of a Minahasa Community in Oarai: Preliminary Research on Social Institutions of Indonesian Migrant Workers in Japan, 前掲誌。

<sup>2</sup> 住民基本台帳・外国人登録 人口 平成23年（2011年）：[http://www.town.oarai.lg.jp/manage/contents/upload/00012\\_20120110\\_0001.pdf](http://www.town.oarai.lg.jp/manage/contents/upload/00012_20120110_0001.pdf)

<sup>3</sup> 筑波大学名誉教授の小野澤正喜氏は以下のようなコメントしている。

「現状では日本全体の留学生数は13万人程度で東京首都圏と京阪神に集中していますから、通常の県では1000 - 2000人程度だと思います。人口300万人の茨城県で留学生7000人という数字は少し多すぎるような気がします。因みに茨城県国際課の資料では平成23年で2608人となっています。筑波大の留学生は震災直前に1900人台になりましたが震災で激減し現在1700人台を回復しているようです。茨城大は300人足らずだと思います。私学では流通経済大がかなりの留学生を入れています。他の私学は少数に留まっています。7000人という数字に何らかの根拠があるとすれば留学生の家族も加えた数字や、近年の超短期ショートステイの数字を加えたもの、それに柏などの日本語学校や専修学校の数字を加えたものかも知れません」。

<sup>4</sup> インドネシア人の公的な集会では、その場にどれほど「重要な」人物を呼べるかで、その集会の格が決まる。われわれの参加は事前に許可を得ていたが、これほど特別扱いを受けるとは予想しなかった。大使館には相当な謝礼を払っている

はずだ。

<sup>5</sup> スチ (suci) とは「清らかな」という意味。

<sup>6</sup> この時のアッラーとはイスラームの最高神ではなく、キリスト教の最高神のこと。アラビア語のアッラーは「最高神」を意味し、イスラームの最高神のみならず、キリスト教の最高神も、あるいはユダヤ教の最高神を共にあらわす。

<sup>7</sup> 今回のインタビューではまだ彼らの本音は引き出せていない。先行研究によると、彼らの賃金は単純労働者の場合、時給 500 円ほどで日本人の半分。熟練でも 800 円ほどで、日本人の単純労働者並である。それから、永住権や帰化の難しさなど、課題はたくさんある。例えば、以下を参照のこと。中島成久編『多文化共生・地球市民形成のためのディアスポラ研究－あるべき日本の近未来像の提示』2010 年の中、Riwanto Tيروسudarmo, “Indonesian Diaspora in Japan and Other Counties” の論文。

<sup>8</sup> [http://www.mgu.ac.jp/~jfmorris/Tsunami/Shinsai% 20wo% 20Norikoeru](http://www.mgu.ac.jp/~jfmorris/Tsunami/Shinsai%20wo%20Norikoeru)

<sup>9</sup> 中島の指導する院生の研究テーマが滞日ムスリムの教育事情であるので、L さんには、その家族、友人、他の国のムスリムのことなど、多くの情報を提供してもらっている。

<sup>10</sup> 資料：地域と外国人の共生～茨城県内の外国人の生活実態を探る

<http://www.arc.or.jp/ARC/201005/ARC1005gatu/1005chousa.pdf>

<sup>11</sup> 読売新聞（夕刊）「社長は不良おやじ」（1～5）、2012 年 2 月 27 日～3 月 1 日